

## 書 評

山崎謹哉編 近世歴史地理学：大明堂，1985年，  
A 5版，184頁，2,000円

多年，近世歴史地理の研究に活躍しておられる編者ほか14名によって執筆された概説書である。全体の構成は以下のようになっている。

まずⅠ「序説」で編者は，小牧実繁・内田寛一・藤岡謙二郎各氏らの所説を検討した上で近世歴史地理学の位置づけを試み，(1)「近世歴史地理学の創始者として，……内田があげられる」こと，(2)「条里復原の研究やフィールド・ワークを重点として，それに古い歴史書や紀行書を兼用して地理的立場から過去を復原し，解釈しようとする。歴史地理学が戦後しばらく間続いた」のちに，「藩や村方の文書を使って地理的解釈を行なおうとする近世歴史地理学が盛んとなった」こと，(3)「近世歴史地理学研究が対象とする課題は幕藩体制という封建制下のもの……幕藩制なるものの性格を理解し，その基礎に立っての研究展開であらねばならない」こと，などを述べている。続くⅡ「近世日本の地域的性格」の章も編者の執筆で，東日本と西日本を対置して考えることによって，章の標題である近世日本の地域的性格をとらえてみようとする姿勢がうかがわれる。ここまでがいわば総論で，本書を貫く基本姿勢が示されていると読むことができよう。

以下がいわば各論，Ⅲ「政治的領域の区画」は池田善昭氏が担当し，「天領の地理的性格」「藩領の地域構造」「地域」としての旗本知行領」を，それぞれ説明している。Ⅳ「人口分布の地域的特色」は，前半を坪内庄次氏が分担し，「東北日本と西南日本」の対置，「山地と平野」の対置（ただし後者は，飛山濃水と呼ばれてきた飛騨・美濃に尾張を加えた範囲内での対置）において人口分布を概観し，後半は溝口常俊氏が分担して，都市の人口構成，村落の人口構成を例示すると共に，近世を通じての都市への人口流入の実態説明が今後の課題の一つであることを指摘している。

Ⅴ「藩政期の都市とその機能」の章では，「城下町の形成と分布」を川村博忠氏が，「市場町の性格と機能」を中島義一氏が，「宿場町の成立と町並形成」を土田良一氏が，「港町の地域構造」を東皓伝氏が，「門前町の立地と発達」を長野覚氏がそれぞれ担当し，略説している。対する村落については

Ⅵ「藩政村の性格と分布」の章を編者が担当し，「藩政村の性格と規模」を概観したのち，「古村と新田村」，ことに「新田村の成立と構造」に紙幅を割いて説明している。

Ⅶ「交通の地域的展開」の章は，浅香勝輔氏が諸街道を網羅的に概観して，その歴史的景観に言及し，小野寺淳氏が米の運漕を主とする東日本の河川交通，木材流送を主とする西日本のそれ，という位置づけの中で，特論的に北上川舟運をとりあげ，また，東皓伝氏が東廻り・西廻り・江戸上方間の海上交通について概説している。Ⅷ「領国経済と産業の発達」の章は，まず細井淳志郎氏が「商業的農業の発展」に関する研究成果若干を例示し，且つその方向の研究史料という位置づけで農書のいくつかを略説している。次いで編者の山崎氏が，農村家内工業の発展を概観し，特に綿織物業と酒造業をとりあげて分布と立地を説明している。さらに，古田悦造氏が関東における漁業の発展，魚肥と鮮魚の流通，それらに寄与した関西漁民の関東出漁などの問題をとりあげ，川崎茂氏が銀山の盛衰と銅山の台頭，都市としての鉱山町と背後村落との関係など，鉱業に焦点をあて，木村辰男氏が江戸と上方の商圈の構造を対比する形で，末尾をしめくくっている。以上，私見をまじえずに本書の構成と執筆分担を通覧した。いくつかの感想を次につけ加えておきたい。

行政領域からはじまって人口・集落(都市・村落)・交通・産業に及ぶ広い守備範囲に，まんべんなく目くばりした章節構成と，それらの各章節を担当した各専門家の要を得たとりまとめの集合としての多彩さは，本書の大きな魅力になっていると思う。東日本と西日本の対置という，編者が本書の主軸にしようと思図したと思われる視点も，そのような視点の設定がむづかしい章節を除いては充分配慮されており，意図は成功していると感じることができた。その間，あえていうとすれば，序説で編者が述べている上引の(1)～(3)は，問題がないであろうかと，若干気になる。例えば(3)であるが幕藩制を理解し，その基礎の上に立って研究を展開する，という方向とはむしろ逆に，綿密実証的な研究の深化によって，幕藩制あるいはさらに江戸時代とは何かを歴史地理学的に解く，幕藩制下の地域，江戸時代の地域とはどういふものかを解くという方向もあり且つそれはかな

り基本的な研究方向ではないかと思考する。

II章以下の記述の中にも、もう少しつっこんだ説明をうかがいたいと思う箇所がないわけではない。が、それらは「序節」の記述を含めて、本書の側から投げられた問題提起ともいえるのであり、紹介者としては、それらの諸問題をめぐって、今後論争が起こるような情況を期待したい。コンパクトにまとまった近世歴史地理学のテキストを紹介するにあたって、そう思うのである。(足利健亮)

**J. ブズー＝マサビュオ著、菊池一雅・北川光兒共訳 新朝鮮事情：文庫クセジュ669、白水社、1985年、新書判、148頁、750円**

文庫クセジュの669として出された本書は、日本にもなじみの深いフランスの地理学者J. ブズー＝マサビュオ氏による朝鮮地誌で、原題は“La Coree (朝鮮)”である。日本人にとっての朝鮮は、まだまだ「近くて遠い」という形容のあてはまる地域であり、本書は同文庫クセジュで出している李玉著・金容権訳の『朝鮮史』（白水社、1683）とともに、その平易な概説書として歓迎されよう。もちろん、朝鮮に関する情報は、ここ数年来、拡充が著しく、個々のトピックについては、本書よりもさらに踏み込んだ生々しい情報に接することも不可能ではない。しかし、本書は朝鮮の自然・人文の地理的基礎について、適切なデータと解明を示し、興味本位に墮することなしに、節度をもって、手ぎわよくまとめている点で、やはり貴重な存在といえる。

全体は4部からなり、第1部で国土と住民、第2部で経済のあゆみを概観したあと、第3部および第4部で大韓民国と朝鮮民主主義人民共和国の経済・社会・諸地域の状況について解説するという構成になっている。文庫本という性質上、学術用語の多用やデータの羅列は控えてあり、文体も読みやすいものになっているので、一般読者にも受け入れられよう。

ただ、評者としては、朝鮮についてのまとまった地理的知識が得られるという点もさることながら、本書に垣間みられる「欧米の目」の方に、より興味を覚えた（著者自身はもちろん、著者が主要参考文献にあげているのも、ほとんどが欧米人によるものである）。この「欧米の目」を感じさせる場面はいくつかあるが、ここでは、そのうちの二つについて述べてみたい。

その一つは、朝鮮という地域の特徴を浮かび上が

らせる際の描写の濃淡である。半島国イタリアという身近な比較材料をもつフランスにあって（ただし、イタリアと朝鮮の比較はあまり前面に出てこない）、極東の一地域に目を向ける著者と、共通点の多い隣邦に住み、自国との差異をきわ立たせることによってこそ、朝鮮の地域像をよく理解できる我々日本人とでは、描写の重点の置き方に差が出るのは当然であろう。たとえば、気候、稲作、田園風景等に関する本書の記述は、我々日本人にとって、朝鮮の輪郭を今一つ明確にしてくれていないようにも思える。

しかし、多少逆説めいた言い方になるが、我々が本書を読む意義は、こういう点にもあるのではなからうか。我々が自明のこととして通りすぎがちな事象についても、丁寧な描写がなされ、言葉の選び方一つにも、日本語の慣用とは異なった趣きがあったりして、あらためて新鮮な印象を受けることがある。また、文体そのものは平明でありながら、あえて日本的な語彙に近づけすぎている訳文も、そうした良さを伝えるのに役立っている。

二つめは、朝鮮という対象との距離のとり方である。近・現代の朝鮮を語る上で避けて通れない日本の植民地統治や南北分断問題は、日本人にも、また韓国・朝鮮人にも直接・間接にさまざまな影を投げかけており、こうした問題について、どちらに向かっても、常に率直かつ公正な態度を保ち続けるには、相当の困難が伴うことが少なくない（1984年に出た魚塘著『朝鮮新風土記』は、自身の故国を扱っているだけに、実体験や深い理解に裏づけられた記述に富み、得るべきものは多々あるのだが、評者がこれを両手を挙げて推奨するのをためらう理由は、この距離のとり方に難があって、せつかくの労作を損う部分が散見されるからである）。その点、本書はそういう困難をある程度免れえているといえよう。南北のどちらにも、また日本にも、淡々と、しかし、率直な指摘を行っている。

ただ、それでもなお、この分断国家の記述には、実体に手の届かないもどかしさが、依然として、つきまとっている。もちろん、それは著者の責に帰するものというより、対象に自由に踏み込んで、同じ精度、同じ距離感で観察したり、公式発表なり資料なりを同等の水準で比較・照合して論じたりしていくという現在の状況に由来するところが大きいと思えるべきであろう。その意味で、地理学研究の対象としての朝鮮の全体像は、まだまだ「近くて遠い国」